

令和7年度 県立山形盲学校 学校評価書(自己評価・学校関係者評価)

学校教育目標 自分の障がいと向き合い、自ら考え判断し社会で生きていく力を育てる	
経営の重点	① 自己の障がいと向き合い、自立に向けて取り組もうとする意欲と自信を育てるとともに、未来を主体的に生きるための思考力、判断力、表現力を育成する。
	② 社会で生きていくために必要な「人と関わる力」「役割を果たす力」「元気に働く体・生活する体」を育む。
	③ 一人一人の実態と教育的ニーズを踏まえた「個別最適な学び」と「協働的な学び」を進める。
	④ 視覚障がい教育についての理解推進と共生社会の実現に向けて、効果的な発信と連携に努める。

達成度： A 達成 B 概ね達成 C やや不十分 D 不十分

No	評価内容	方策の具体	達成状況	成果と課題
1	個々の教育的ニーズを踏まえた個別最適な学びの保障と協働的な学びの推進	研究実践を踏まえた授業実践	B	個々の教育的ニーズについて具体的に確認し、評価できるよう様式を変更した。 個別最適な学びの保障に係る授業改善に関し引き続き研鑽を要する。
2	自立への意欲や自信を育むキャリア教育及び進路指導の充実	学習場面における自己選択自己決定の保障 自立や社会参加に向けた体験学習、校外学習、講演会等の実施	B	音楽鑑賞活動の実施から児童生徒の興味関心を引き出せた。活動のねらいの吟味や、更に児童生徒の主体性を生かせる教育環境の整備が必要。 小学部段階から、自身のキャリアプラン等に係る学びが必要。 カリキュラムマネジメントと関連して教科横断的な体験学習の設定を継続していくことが必要。
3	「交流及び共同学習」における機会拡大と内容の充実	交流回数、時間の拡大 東北地区盲学校間オンライン交流実施 同年齢の視覚障がいの仲間との交流学習	B+	小・中学部の学校間交流は内容を充実させ、中学部においては授業交流の回数も増えた。事前事後学習を充実し児童生徒の主体的な学びにつながった。 中学部生において、生徒の希望に沿って居住地校交流の実施した。事前の打ち合わせで生徒理解を進め充実感のある交流ができた。 盲学校間において、同年齢の集団学習機会を設定し、中学部では、道徳の学習交流をオンラインでつなぎ、継

				続的に実施した。
4	視覚障がい教育についての理解推進と共生社会の実現に向けた効果的な発信	年間を通した研修計画の実施 各種相談業務実施を踏まえた研修・研鑽	B	視覚障がいのみにとどまらない、専門性の充実が必要。重複障がいを含めた専門性の向上を図る必要有。 視覚障がい情報センターからの要請を受けて広く視覚障がい教育の情報を広めていく役割も充実していた。

学 校 関 係 者 評 価(意見・要望・評価等)				
「為せば成る～」まさに地で行く努力と信念に感銘いたしました。山盲祭の発表で小学部の踊っている笑顔がよかった。				
児童生徒の皆さんの授業や実習に懸命に取り組む姿に感心いたしました。皆さんの成長と活躍をお祈りいたします。 先生がたの児童生徒に寄り添っての授業実習の姿にありがたいと思いました。				
点字学習への環境が整っていて触る経験の充実度が高いと思いました。				
聴覚情報の獲得も重視されていると伺いました。中途障がいの方への学習指導では指導内容、方法の個別の配慮が大変と伺いました。日々の準備に頭が下がります。				
幼小学部の指導の充実、安定がその後の学習速度、習熟度の向上には大切だと全体を参観させていただいて再認識されました。継続ある系統性のある教育課程編成に努力されていることに敬意を表します。				
教育相談の件数が素晴らしい。今後も頑張ってもらいたい。				
普通科の1年生が実習でいらっしゃって、こちらも生徒さんの様子を見ての感想。 どこまで支援していいのかわからないことがある。今回の生徒さんは受援力の高い方であった。「ここは一人では難しい、怖い、不安だ」ということも、きちんと自分で判断して伝えることができている。この受援力は教育的な効果だと感じた。 社会的な課題として、視覚障がい者の一般就労については山形県の現状は厳しい。大工場の多い山形県ではあるが、ヘルスキーパーの設置が進まない。				
地域との交流ではいつもお世話になっている。身体の成長とともに、心の成長にも寄与できるよう願っています。少人数だからこそできることもあると思う。 中川福祉村の取り組みは文部省指定事業からかなりの時間が経つが、子どもの成長とともに、地域の活性化にもつながっている。				
健常者はどこまで介助していいのかわからないことがある。弱視と全盲のご夫婦の友人が山形に遊びに来たときも、ご夫婦はどこまで駅員に援助依頼してよいか迷った経験があった。駅員さんも弱視の見え方を誤解されていたようだった。また、会議や食事の場での靴を並べること一つとっても全盲の方は自分で物を管理しているので、晴眼者が勝手に靴を並べ替えて揃えることは不適切であると感じたことがある。 自分がこの学校に入学したときも全盲の方が白杖も持たずグラウンドを走っているのを見て驚いたことを覚えている。 このような日常生活の経験や訓練を盲学校で行っている。このように社会と当事者のギャップを埋められればいい。				

次年度に向けた改善の具体	
1	<ul style="list-style-type: none"> ① 本人、保護者の願いの共有等を含めた、個別の教育支援計画、個別の指導計画作成の丁寧な説明による「教育的ニーズ」の的確な把握 ② 「教育的ニーズ」を踏まえた学習指導と PDCA サイクルを生かした授業改善による個別最適な学びの保障
2	<ul style="list-style-type: none"> ① 小中高一貫した進路指導の充実(サポートファイルの活用) ② 学校生活全般における児童生徒が主体的にかかわれる活動の充実により自己選択、自己決定の保障を図る。
3	<ul style="list-style-type: none"> ① 集団での自己表現力の発揮、仲間との協力、体験学習の充実を図る。
4	<ul style="list-style-type: none"> ① 教員一人一人が課題意識をもった研修実施により多様な事案への対応力の強化。